

観古考新

岡谷市史編さん室だより『観古考新』No.37
2026(令和8)年 2月

岡谷市教育委員会生涯学習課
岡谷市史編さん室 編集・発行
岡谷市中央町1-11-1 イルフプラザ3F
TEL 0266-78-8455

WEB はこちら



観古考新：古い事柄を顧みて、新しい問題を考察すること

～岡谷の歴史を深く思い、岡谷の今を重ね、岡谷の未来が拓けるような新しい市史をめざして～

調査レポート① 諏訪湖のシジミ

大正時代には530トンもとれた！！（参照：長野県水産試験場 HP）

諏訪湖のシジミは、大正6(1917)年には530トン(現在の全漁獲量の5倍以上)も漁獲された記録があります。その頃は湖の中で繁殖していました。増産のために、湖で捕獲した幼貝を湖内各所に移植することが昭和28(1953)年まで行われていました。マシジミが減少したため、琵琶湖産のセタシジミを移植して放流するようになりましたが、琵琶湖での激減により昭和43(1968)年にはセタシジミの放流もできなくなりました。



諏訪湖のシジミは江戸時代に移植されたもの（参照：「岡谷市史」上巻p.867 下巻p.379）

「岡谷市史」によれば、諏訪湖のシジミは、宮坂恒由という人が天保10(1839)年と同12年に甲斐国(現山梨県)から移植したものです。やがてシジミは諏訪湖の名物となり、明治から昭和初年にかけてたくさん採されました。しかしその後、湖底の土が泥土質に変化したため、砂質土を好むシジミは減少しました。

諏訪湖のシジミの今（参照：「諏訪湖創生ビジョン」p51）

長野県は、「シジミが採れる諏訪湖」を目指して平成27(2015)年度から覆砂(ふくさ)を実施しており、造成した覆砂場所ではシジミの生息が継続的に確認されています。



■写真：「覆砂場所で採れたシジミ」 R8市史編さん室撮影(長野県水産試験場諏訪支場にて)
※大きいものは4cmほど

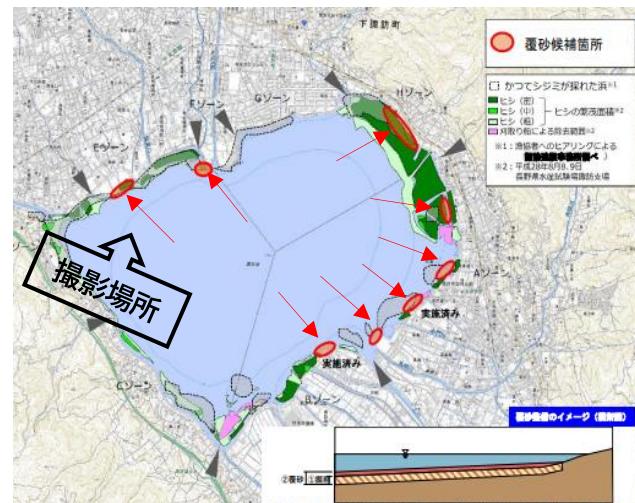


【コラム】シジミの思い出

写真と文 鮎澤 毅氏(岡谷市川岸) 昭和38年撮影



覆砂候補箇所 赤矢印 (諏訪湖創生ビジョン p. 52 に加筆)



この写真は私が就職した昭和38年、旧釜口水門の湊側から岡谷市の下浜方向へカメラをむけて撮影したものです。カラーフィルムは売っていましたが高価で色があまりよくありませんでした。カメラは、当時はまだ高額だった一眼レフで、従来のカメラに比べ格段にピントがよかったのを憶えています。この頃は水門の近くには泥舟が沢山ならび、シジミは沢山どれ漁師の家の周りには沢山シジミやツブのカラが放置されていました。しかし、高度成長時代に入ると、雑排水が諏訪湖に流入し、魚介類は減少の一途をたどる運命になりました。

調査レポート② 岡谷市立川岸小学校玄関前の片倉兼太郎頌徳碑

渋澤栄一



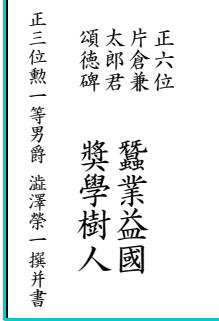
▲出典:フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』(パブリックドメイン)

渋澤栄一

- ・日本の実業家、慈善家、政治家
- ・株式会社組織による企業の創設・育成、教育機関・社会公共事業の支援、民間外交等に尽力
- 天保11年2月13日～昭和6年11月11日



▲碑の表(おもて)面上部



▲碑の裏(うら)面



▲碑の裏(うら)面



▲令和7年 市史編さん室撮影



▲出典:「初代片倉兼太郎君事歴」口絵写真 大正10年 足立栗園著

初代 片倉兼太郎

- 初代 片倉兼太郎
- ・日本の実業家、資本家
 - ・信濃國諏訪郡三沢村(のちの川岸村、現在の岡谷市川岸)生
 - ・片倉組(現在の片倉工業)を設立、片倉財閥の基礎を築く。
 - 嘉永2年11月29日～大正6年2月13日

頌徳碑建立のいきさつと、碑文「蠶業益國 奨學樹人」の意味を調べました

調査中に出会った一冊の本「初代片倉兼太郎君事歴」

「事歴」とは、物事の来歴や道筋のことをいいます。頌徳碑建立のいきさつが記されています。

◆大正10年 足立栗園著
岡谷市立神明小学校校長室所蔵

- この目次には
- ・片倉組の起源と其活躍
 - ・村治上の貢献と其活動
 - ・諏訪索道株式会社の組織
 - ・中央東線工事続行の奔走
 - ・川岸小学校建設に対する努力
 - ・川岸製糸所及各地製糸所の発展
 - ・同業者親睦と従業員優遇
 - ・不文の家憲
 - ・明道館及私立小学校の建設
 - ・葬儀と弔辞 などがあります。

同書「葬儀と弔辞」pp.210-211

君の逝去後、平素其の徳風を敬慕せる村民は、頌徳碑を建設して其の徳を永劫に傳へんことを決議しぬ。
乃ち大正八年十二月七日君が生前力を盡したる川岸小学校に高さ丈餘の巍然たる豊碑を建てたり、撰文は碩學土屋弘先生にして揮毫は子爵渋澤栄一閣下なり、其の文に曰く好箇の紀念と謂ふべきなり。

【要約】
片倉兼太郎君逝去後、平素からその徳風を敬慕してきた川岸村民は、頌徳碑を建ててその徳を永劫に伝えようと決議した。
そして、大正八年十二月七日、君が生前力を尽した川岸小学校に、高さ一丈(約3m)余の高くてびえたつ石碑を建てた。碑の撰文は、博学で名高い土屋弘先生、揮毫は子爵渋澤栄一閣下である。それにいうところは蠶業益國、奨學樹人、これは後世に残すべき大切な碑なのである。

「蠶業益國 奨學樹人」とはどんな意味なのでしょうか。

「蠶」の字は「蚕」の旧字体ですから、蠶業とは蚕業、すなわち製糸業のことです。益國とは字のごとく国を富ます意味です。「奨學」は「奨学」の旧字体で、文字どおり学問を奨励することです。

樹人について調べますと、出典は古代中国の典籍「管子一権修篇一」にありました。「終身之計莫如樹人」です。

書き下し文は「終身の計 人を樹(う)うるに如(し)くは無し」
訳は「終身の計画として、人を植えるのに及ぶものはない。」

意訳すると「一生涯の計画を立てるならば、人材を育てることに尽きる。」となります。

以上、片倉兼太郎の功績や徳を頌える言葉として「蠶業益國 奨學樹人」(学問を奨励し、学校や教育を大事して、人材を育成した)を碑文として選んだということことがわかります。

初代兼太郎の事歴の一つ「川岸小学校建設に対する努力」



▲川岸尋常高等小学校開校式
明治41年10月30日当日撮影
「川岸小学校百年史」口絵写真
昭和49年 川岸小学校発行

江戸時代までの川岸地区の5村は、明治7(1874)年に川岸村として合併しました。しかし、特に村内教育にあっては、村会の決議とした一村一校に定まった後も、校舎の位置について争っていました。これに対して兼太郎は、熱誠をもって村民を諭し、議員を説き、村内中央部に校舎の位置を定めました。そして、校舎建築委員として、一身に全責任を負い、熱心に監督指揮して、明治39(1906)年に川岸小学校の新築落成となりました。

撰文者 土屋 弘先生は漢学者

土屋 弘(ひろし) 号は鳳洲(ほうしゅう)
天保12(1841)年～大正15(1926)年
・幕末～大正期の漢学者・教育者
・奈良師範学校長、華族女学校教授、東洋大学教授などを歴任
・宮中講書始の講師も努めた。

頌徳碑を見学に行きましたか!

この碑の前に立つと、かつて岡谷の製糸業を牽引し、世界の「糸都岡谷」へと発展させた初代 片倉兼太郎の偉業と人徳を偲ぶことができます。兼太郎の教訓を岡谷の未来にどう活かせられるか、思いを巡らせてみてはいかがでしょうか。



住所:岡谷市川岸中1-1-2
岡谷市都市計画基本図 1/2500を部分複写・加筆 0 100m

(2面担当:市史編さん室専門職員 小林 博)